

東南アジア農業問題研究会の33年

たき がわ つとむ
滝 川 勉

はしがき

監修 重富真一

滝川勉氏は、1924年、中国大連市生まれ。アジア経済研究所には創設間もない1964年から1979年まで勤め、その後、筑波大学農林学系教授、日本大学生物資源科学部教授を歴任した。研究所在職中は、自身のフィールドであるフィリピン研究をおこなうと同時に、アジア農業・農村に関する共同研究を組織し、また調査研究部長として研究所における調査研究も統括した。研究所退職後も、東南アジア農業農村研究の第一人者として活躍してこられた。

ここに収録したのは、滝川氏がアジア経済研究所の「農村開発と農村研究」研究会（主査：水野正己日本大学生物資源科学部教授）で、2005年9月22日に行った講演の記録である。このなかで滝川氏は、およそ40年前に、アジア経済研究所においてどのようにアジア途上国の農業農村に関する共同研究を立ち上げたのか、またその後どのように展開させてきたのかを語った。それは日本における東南アジア農村研究の草創期に関する貴重な証言である。幸い講演は録音されていたので、それを活字にしたものをもとに滝川氏に手を入れてもらい、監修者が注記（識別のため＊を付した）と資料を付け加えた。

講演記録の利用を許可された「農村開発と農村研究」研究会と、テープ起こしの労をとって下さった辰己佳寿子氏（山口大学講師）に、感謝の意を表したい。

（アジア経済研究所地域研究センター）

ただいま、ご紹介に預かりました滝川です。もう歳も80才になりまして、あまりみなさんのお役に立つような話はできそうにないのですけれども。古い昔のことで記憶違いがあるかもしれませんが、その際にご勘弁願います。アジ研（アジア経済研究所）の研究会ということなので、久しぶりにアジ研のメンバーに会えるんだと思うと非常に嬉しくてですね、いろんなことを忘れて今日は喜んで来たわけです。ただ、おそらく回顧といってもきちんとまとまった話しがで

きるかどうか……。電話で、漫談風にといわれたので、その辺で、勇気づけられて来ました。

ちょっとお断りしておきますけれども、みなさんもすでにご覧になったかもしれませんが、私どもが、農業問題研究会をアジ研で始めてから33年経って、いよいよやめる時に、アジ研編集部から回顧録をやってみないかということで、それが『アジ研ワールド・トレンド』という機関誌の1998年5月号（第34号）に「変わりゆく農業と農村 東南アジアの現場から」と

表1 アジア経済研究所・東南アジア農業問題研究会の成果

出版年	編者	書名	執筆者（対象国・地域）
1966	滝川勉・斎藤仁編	『アジアの土地制度と農村社会構造』（研究参考資料111）	斎藤仁（日本）、梅原弘光（フィリピン）、岡崎正孝（イラン）、倉田勇（インドネシア）、斎藤仁（東南アジア）、篠原章（インド）、滝川勉（東南アジア）、友杉孝（タイ）、平島成望（バキスタン）
67	滝川勉・斎藤仁編	『アジアの土地制度と農村社会構造』（研究参考資料128）	鶴飼仙子（マレーシア）、梅原弘光（フィリピン）、倉田勇（インドネシア）、斎藤仁（日本）、篠原章（インド）、高橋彰（インド）、滝川勉（低開発諸国）、友杉孝（タイ）
68	滝川勉・斎藤仁編	『アジアの土地制度と農村社会構造』（研究双書167）	鶴飼仙子（マレーシア）、梅原弘光（フィリピン）、岡崎正孝（イラン）、北原淳（タイ）、斎藤仁（東南アジア）、高橋彰（インド）、滝川勉（アジア）、友杉孝（タイ）
70	滝川勉編	『東南アジア農業問題研究の現状』（研究参考資料150）	梅原弘光（フィリピン）、岡崎正孝（イラン）、北原淳（タイ）、倉田勇（インドネシア）、滝川勉（東南アジア）、友杉孝（タイ）
73	滝川勉・斎藤仁編	『アジアの農業協同組合』（研究双書209）	石井章（メキシコ）、梅原弘光（フィリピン）、大岩川和正（イスラエル）、加藤祐三（中国）、加納啓良（インドネシア）、斎藤仁（アジア低開発諸国）、斎藤仁（日本）、桜井浩（韓国）、孫炳燾（台湾）、高橋満（インド）、滝川勉（フィリピン）、友杉孝（タイ）、堀井健三（マレーシア）
76	斎藤仁編	『アジア土地政策論序説』（研究双書234）	斎藤仁（日本）、堀井健三（マレーシア）、村野勉（ベトナム）、石井章（ペルー）、加納啓良（インドネシア）、友杉孝（タイ）、北原淳（タイ）、梅原弘光（フィリピン）
80	滝川勉編	『東南アジア農村社会構造の変動』（研究参考資料289）	斎藤仁（日本）、滝川勉（フィリピン）、梅原弘光（フィリピン）、村井吉敬（インドネシア）、堀井健三（マレーシア）、末廣昭（タイ）
82	滝川勉編	『東南アジア農村の低所得階層』（研究双書311）	水野広祐（インドネシア）、堀井健三（マレーシア）、田中学（日本）、滝川勉（東南アジア）、斎藤仁（日本）、斎藤照子（ビルマ）、加納啓良（インドネシア）、梅原弘光（フィリピン）、村井吉敬（インドネシア）
85	滝川勉編	『東南アジアの農業変化と農民組織 序説的考察』（研究双書327）	斎藤仁（日本）、田中学（日本）、滝川勉（フィリピン）、斎藤照子（ビルマ）、加納啓良（インドネシア）、藤本彰三（マレーシア）、梅原弘光（フィリピン）、米倉等（インドネシア）、水野広祐（インドネシア）
87	滝川勉編	『東南アジアの農業技術変革と農村社会』（研究双書355）	斎藤仁（日本）、田中学（日本）、米倉等（インドネシア）、梅原弘光（フィリピン）、滝川勉（フィリピン）、斎藤照子（ビルマ）、堀井健三（マレーシア）、藤本彰三（マレーシア）、末廣昭（タイ）、加納啓良（インドネシア）
88	梅原弘光編	『東南アジア農業の商業化』（研究双書378）	滝川勉（フィリピン）、斎藤仁（日本）、田中学（日本）、水野広祐（インドネシア）、藤本彰三（マレーシア）、梅原弘光（フィリピン）、堀井健三（マレーシア）、末廣昭（タイ）、米倉等（インドネシア）
91	梅原弘光編	『東南アジアの土地制度と農業変化』（研究双書406）	滝川勉（フィリピン）、田中学（日本）、斎藤照子（ビルマ）、高橋昭雄（ミャンマー）、藤本彰三（タイ）、加納啓良（インドネシア）、水野広祐（インドネシア）、梅原弘光（フィリピン）、堀井健三（マレーシア）
93	梅原弘光・水野広祐編	『東南アジア農村階層の変動』（研究双書431）	田中学（日本）、滝川勉（フィリピン）、梅原弘光（フィリピン）、加納啓良（インドネシア）、水野広祐（インドネシア）、堀井健三（マレーシア）、藤本彰三（マレーシア）、重富真一（タイ）
95	水野広祐編	『東南アジア農村の就業構造』（研究双書451）	田中学（日本）、高橋昭雄（ビルマ）、梅原弘光（フィリピン）、水野広祐（インドネシア）、重富真一（タイ）、藤本彰三（マレーシア）
97	水野広祐・重富真一編	『東南アジアの経済開発と土地制度』（研究双書477）	田中学（日本）、加納啓良（インドネシア）、岡本郁子（ビルマ）、水野広祐（インドネシア）、梅原弘光（フィリピン）、滝川勉（フィリピン）、藤本彰三（マレーシア）、重富真一（タイ）
98	加納啓良編	『東南アジア農村発展の主体と組織 近代日本との比較から』（研究双書492）	加納啓良（インドネシア）、高橋昭雄（ビルマ）、東茂樹（タイ）、滝川勉（フィリピン）、梅原弘光（フィリピン）、田中学（日本）、重富真一（タイ）、水野広祐（インドネシア）

（出所）重富真一作成。

（注）執筆者名につづくカッコ内の地域名、国名は論文タイトルに従った。

いう特集になって出ております。座談会形式になっていて、その時の記録が載っています。これと重複するようなことが多少でてるかもしれませんが。この特集の中に、私がこれから話す助けになるのですが、東南アジア農業問題研究会の成果というか、我々の研究会が出した研究参考資料、研究双書の名前が刊行順にでております。ただ、最後に出した加納（1998）がおちている。これが出るちょっと前に座談会をやったものですから（＊研究会の全成果は表1を参照）。

さて、水野正己さんから「どうして東南アジア農業の研究を始めたのか」、「そこで目指したものは何か」という質問を出されておるわけですが、私も、ちょっと最初に研究会を始めた経緯をお話ししておきましょう。

1958年（昭和33年）にアジ研ができました。昭和35年に第1回の海外派遣員制度ができて、2年間現地に入るわけですが、1962（昭和37年）年以降になると海外現地経験者が帰ってくるわけです。そういう人たちの知識や経験を組織化して発表するという気運が出てきたと思います。それまでは、研究所ということですから何も出さないわけにはいかないので、主として戦前の満鉄調査部、東亜研究所などで仕事をしてきた人たちに委託をして、本を出していたわけです。しかし、研究所の人材がだんだん増えてくる。そこで内部の研究の成果を出していこうじゃないか、ということから、1965年（昭和40年）、調研（＊調査研究部）を中心といたしまして、アジ研で3カ年計画が作られたのです。合同研究プロジェクトというものを発足させたわけですね。包括的なテーマは、「低開発地域の経済成長と国際協力」という大型なテーマが

立てられまして、その中で調研が中心的な仕事をするということになったわけです。それで私も農業に関心をもった者達も何人がいたわけで、我々も何かやろうじゃないかということから、「農業構造研究会」という名前でプロジェクトを立てました。

それで、質問の第1と関連するのですが、もう、「どうして東南アジアの農業の研究をやり出したのか」ということですが、当時の東南アジアの経済は未発達で、どの国でも外国・先進国から部品を輸入して組み立て加工するぐらいの工業が、せいぜいあちこちにみられる程度。そのように経済が未発達でした。それでは、どうしたら発展するのだろうか、どうして未発達なのだろう、ということを考えたときに、その基礎に農業・農民があるのではないかと。今と違いました。当時は、どこの東南アジアの国でも人口の6～7割が農村人口なんです。ほとんどが農民である。ところがその農業をみてみると、驚くほど農業生産力が低いのです。稲でいうと、高いところでようやく日本の半分、低いところで日本の3分の1程度なんです。しかも、農業生産力が伸びる様子もない、停滞している……。これがどうしてなのか、これを解明しなければ、東南アジアはわからないのではないかと。ということから、土地生産力の低さ、停滞、そういったものの基礎・根源、なぜそうなのかを解明していこうではないかと、みんなで各国について勉強してみようではないかと。そういうことがわかってくると、東南アジア経済、社会全体が理解できるのではないかと考えました。では、どういうふうにして東南アジアの農業・農村問題にアプローチしたらよいのか、これが問題になったわけです。そこで、私が中心になって考

えたのは、土地制度を基軸にしようではないかということです。それを基軸にしてそのほかに農村の共同体の関係、宗教、家族関係、そういうものをからめて一緒に研究していけば、農業・農村がわかってくるのではないだろうか、ということから、土地制度を中心にやりました。どうして、土地制度、つまり地主小作関係ですけども、これを真っ先に基軸にしたのかというと、これはやはり、戦後日本の農地改革が終わってからあまり経っていないし、それから、日本もかつては、農業の生産力は低かった、農民も貧乏であった。それについての論争は、例の有名な講座派・労農派論争。まあこれが、戦前はもちろん、戦後まで延々と続いてですね。簡単に言うと、日本の農民の貧困や低生産性の原因となる高率地代　なぜそれが存在しているのか　について基本的な見解がわかれていることから、2つの学派が出ていたわけですね。当然われわれもそういった日本の学問、学界の戦後状況、そういうものに頭が洗脳されていたから、東南アジアもまあその辺から接近していったらよいのではないだろうかというのがそもそもの発端です。

実際に、日本の地主小作関係を念頭に置いてやってみましたが、しかし、これがやってみるとだいぶ違うんですね。だんだん違いがわかってきたんです。ひとことで、どこに大きな違いがあるかということ、地主小作が他人同士というのが日本では普通なんですね。ところが、東南アジアに行ってみると、これは重富君もタイについての著作で書いているけれども、親と子供が地主小作関係をむすんでいたり、あるいはマレーシアでも血縁関係でできていたりするんですね。もちろん、全部ではありませんが、国、

地域によってはそういう例がいくつもでてくるので、ずいぶん違いがあると思って驚いたんですけど。まあ、結果としては、我々のもっていた通念からすると、フィリピンが割に理解しやすいような気がします。ただフィリピン国内でも、地域によってかなり違うようですね。だから、国別ではなく、地域性もみていかないと間違えることになる。そういったことで、3年間の研究会を発足させました。同時に、日本農業の研究とは、どこかでへその緒がつながっているわけですから、あわよくば東南アジア研究を今のように進めていくにしても、その研究の成果をよりどころにして、日本の農業をできるだけ相対化してみようではないか。そういう野心がもうひとつあったのです。そしてそのことがまた、さらに東南アジアをよりよく理解するための方法にもなりうるのではないかと、そういう野心がありまして、そこで、研究会に、日本農業の専門家に入ってもらったわけです。ひとり、私が農業総合研究所にいたときの親友の斎藤仁氏です。それからもうひとり、東大農学部で教授をしていた田中学氏、このお2人に入ってもらいまして、研究会メンバーとして報告してもらったし、そして最初からほとんど最後まで仲間になってもらったわけです。

日本農業・農村を相対化して考えるという点については、これはむしろ斎藤仁さんなんかが一番影響を与えたのではないかという気がします。彼は、その後日本農業・農村を「自治村落」と呼ぶようになったのですね。「自治村落論」を出して問題提起をしている。彼が自治村落論を考える過程で、アジ研の我々の研究会で書いた論文が全部、斎藤（1989）の中に入っています。どこまで日本の農業を相対化したか、

これを読んでみるとかなりよくわかります。彼は、はしがきの中で以下のように述べています。「農業問題の把握においてこのように村落社会という要素を入れたらどうかという考えは、1960年代の後半から20数年にわたって参加させていただいたアジア経済研究所の研究会での議論によって啓発されて生まれたものである。本書収録の論文がアジア経済研究所によって公開されたものが多いのは、そのためである。国により地方によってそれぞれの特徴を持ちながらも日本以外のアジア諸国の村落社会は日本と明らかに異なっている。それについて門外漢なりに学ぶ機会を得て、日本の村落社会と農業問題を見直すことになったのである」[齋藤 1989,

1] 彼が我々と一緒に研究をやりながら、日本の農業を相対化してきた努力の所産なんですね。もし関心のある方は、ぜひ読まれるとよいと思います。

私は、齋藤仁さんと話をしていたときに、「自治村落」の自治ということを厳密に考えると、やっぱり、最後は、武力が保障するんじゃないだろうか。ところが、日本では近世社会以来、武力が村にはないんですね。刀狩り以降なくなってしまった。だから、日本では、自治村落らしい自治村落があるとしたらむしろ中世ではないだろうか。……ということで彼に若干の感想を述べたことがあるのですが、彼は、この「自治村落」という概念を提起したわけです。

で、こういう形で研究会を進めた。その成果は『アジアの土地制度と農村社会構造』という、まさにそのままのやり方をタイトルにしました。なぜ、アジアかといいますと、実はイランをやっている人が入っております。岡崎正孝さんといって大阪外大の先生になった人。彼が入って

いたので、東南アジアとするのは無理がある、それでアジアとしたわけです。こういうことで一番最初の合同研究で、農業・農村をやり始めたのです。当時のアジ研の所管である通産省は、こういうテーマは、あまり面白くなかったみたいですね。面と向かっては言われたことはありませんが……。

これは余談ですけども、アジ研に研究所の参与会（現在は「調査研究懇談会」 編集部注）というのがありまして、外部の学者とか経済界の偉い人を呼んで、アジ研の研究についての参考意見とか評価をしてもらったりする会があったわけです。初期の頃は年に1～2回はやっておりましたね。参与会の後で、当時の笹本武治さんという部長が私のところに飛んできて、「滝川君、君たちの研究会はおおいに好評だったよ」と。というのは経団連の調査部長という人が参与会に来ておられた。その人が、農業構造というのをみて、「ああ、これはよい、こういうテーマが必要なのだ。それから宗教問題をぜひやってほしい、こういうのは我々にとっては非常に大事だ。経済は我々の方がよく知ってる」といわれたそうです（笑）。うちの部長は、農業構造研究会が調査部にあるものですから気になっていたのでしょう。喜んで私のところに知らせに来られたという思い出話があります。

そういうことで、土地制度を中心にやり始めた。そうなれば土地改革あるいは土地政策が各国でどうなっているのだろうかということで、次の研究テーマになりました。もうひとつの農村社会ということで考えたのですが、農村社会あるいは農民の生活はどうなっているのか、こういうのは農民の組織がどういうふうになっているか、あるいはどんなものがあるか、そ

ういったところから入ってみようではないか。協同組合ですね。農業協同組合が次の課題になりました。これは3年かかりました。なかなか大変だね。ほとんど存在しないし、あっても機能していないし、有名無実な存在であったんですね。なぜそうかというところもいろいろ考えてみましたが、これは重富君の時代にはかなり違ったようだが、昔はね。しかし考えてみると、日本でも協同組合が本当に農村にできてきたといえるのは、戦後なんですよ。戦前、日本でも協同組合の研究は非常に盛んにやられたのですが、東畑精一先生とか、近藤康男先生とかがやっておられた。当時の日本の農村というのは協同組合の砂漠だ、荒野であると……砂漠といったのは、東畑先生だったかな、荒野といったのは、近藤先生だったかな……。そういう風に言われておったのです。むしろ、小さい任意団体の小組合なんかが、機能しとったようなのですけど。戦後ですね、日本の協同組合が確立してくるのは。これはやはり、米の供出制度ですね。これがあって、金が組合に集まった。強制的に協同組合を通じないと農民に米の供出代金が来ないので。引き出されなければ貯金になるわけで。当然協同組合が盛んになってくるわけですね。それともうひとつは、農地改革、地主がいなくなったということだと思います。ですから私たちが研究を始めたときに東南アジアの協同組合がろくろくなかった・機能していなかったのは、むしろ当然ではなからうかと思うわけです。

その次に、1960年代後半からいわゆる「緑の革命」、これが起こってきたわけです。農業の技術革新ということでこれが大問題になってきた。停滞を打ち破るひとつの契機として「緑の

革命」がでてきた。これを取り上げて、これがどういう性格をもっているのか、これが農業・農村にどういう影響を与えるだろうか。一番盛んだったのは、1970年代前半ぐらいまででした。そこで、研究会と並行して準備をおこなったわけです。我々には、ほとんど技術関係の人はいなかったのですね。経済が多く、それと農業経済。地理の人もいました。そこで、熱帯の稲作技術の基本的性格を勉強しようと……そこによい人がいたのです。熱帯農業研究センター（現在は「国際農林水産業研究センター」編集部注）というのがありまして、その所長をされていた山田登先生にお願いしました。大変な碩学で、フィリピンにある国際稲研究所（IRRI）の日本代表でおられたかたです。この方が、熱帯稲作とはどういうものか、研究会とは別の日に、週に1回講義をしてくれました。これが2年間、続きました。当時のアジ研会長の小倉武一さんが口をきいてくれたのです。実に熱心な講義をしていただいたのですね。克明なメモを作ってくださいまして……。その内容は、小倉さんが所長をしておられた農政研究センターから山田（1978）として出版され、講義の内容が全部含まれております。非常に勉強になりました。

そういう風に、片方でご入れを受けながら、「緑の革命」について、みんなで勉強しまして1冊の本をつくりあげた。「緑の革命」は非常に影響に広がりがあって、一番儲けたのは、商人ですね。農業の肥料、機械、農薬とか農業資材を売っている商人が一番儲けた。同時にそういうインプットが入ってくるものだから、農村の商業化がどんどん進んでいく。「緑の革命」の過程で、非常に儲けた連中、あるいは富農で

すね、そういうのは非常によくなったんですけれども。中にはますます悪くなった者もいた。われわれは低所得階層と呼んでいたのですが、うかばれない小農、資金をもたない農民、労働者、そういう連中がどうなったか、どういう関わりをもっていたかが当然考えられます。それで農民階層といったことで、研究をいくつか進めていったわけです。「東南アジア農村階層の変動」、それと「就業構造」、どういう風に食っているのだろうかと、そういう風に研究テーマを次々に立てては論文にして出したわけです。

そして最後に、『アジ研ワールド・トレンド』には出ておりませんが、現在東大の東洋文化研究所にいる加納啓良さんがまとめた、東南アジアと日本の農村発展の主体と組織の違い、最後のまとめでできるだけ明らかにしてみようではないかということで、加納（1998）を出して、一応、締めくくったわけです。いつのまにか33年間も続きましたが、それを認めてくれたアジ研には本当に感謝しています。研究会の成果としては、16冊本を出しました（表1）。その他、メンバーの人が、農村調査をした結果を単独で双書や英文で出したりしたのがありますので、それらを含めると20数冊をこえると思います。

今考えてもよかったと思うのは、みんな一生懸命がんばって研究会の報告を書いて必ず出してくれたことですね。研究会によっては、研究会の年度が終わって、いよいよ成果を出す段階になって、出せない、まとまらなかったということがときにあります。必要な資料が手に入らなくて結局よくまとまらなかった、というようなことで。わかったところまで精一杯努力して書けばいいのじゃないかと私は思っていたので

すけど……。そうすると研究所は、責任者、つまり部の責任者を呼び出して、いわゆる譴責処分。私も一度やられました。ただ、アジ研は当時、特殊法人だったのですね、今と違ってね。つまり、予算の90数パーセントは国民の税金なんですね。ですから、わかったことは国民に還元する義務があったと思うんです。できが良くても若干悪くても、良い方がいいんだけど、やはりなんらかの形で還元しなければ、義務を果たすことにならないのではないかと。皆、そういう気持ちもあって、1度も報告書を出さなかったことはなかった。これだけは、アジ研を離れてもよかったなと思っています。

いろいろ報告書を出しましたけども、「どういうふうに評価したらいいか」についてですが、私自身ではどうも正確にできそうにありませんね。歴史が評価してくれるとってしまえばそれまでですが。もちろん、まだまだ不十分ですが、しかし一生懸命やった成果であることは間違いない。そして、研究会で一生懸命研究をやってこられた10名内外の方々ですが、やはり、大学へいってもそのテーマをこつこつと発展させて、よい成果を出しておられます。非常によいことですね。残念ながら、日本の研究に比べると研究者の層が薄いですからね。大学なんかでもやりにくいのではないかと思いますけども。まあ、農村自体がいま大きく動いているわけですから、それを追跡するのは重要なことですね。

そこで次に「どのように研究会をやったか」ということについて申しのべておきます。先程申しましたように、メンバーの多くが経済学のプロパーでした。農業経済も少なく、地理の人が比較的多かったですね。ですから大学で勉強したこともまちまちなんですね。農業を

あまり読まなかった人もいます。そこで、自由参加という形でしただけでも、研究会を組織しましてね、いろいろ本を読んだんです。我々の研究会のメンバーが多かったけど。主に基礎的・理論的な本ですね。レーニンの『ロシアにおける資本主義の発展』も読みました。いまだに、昔のアジ研のメンバーにあうと、「滝川さん、レーニン勉強しましたねえ」と皮肉みたいに言うんだけど。カウツキーの『農業問題』、ポール・バランの『成長の経済学』、大内力先生の『農業経済論』、その他もう忘れちゃったけど、いろいろ読みました。最初は生真面目に昼休みの時間を使ってやっていたのですが、そのうち苦しくなっちゃって。昼休み外でもやるようになっていきました。

それから、我々の研究会は、どうしても必ず現地の農村をみてくるということ、農村調査をするということで、アジ研当局が納得してくれました。大体3週間～1カ月程度は行ってくるわけですけど、そのうちに「1カ月では農村研究なんてできやしない」という声が出てきてね。「どれくらい行ったらいいか」というと、「少なくとも3カ月」というわけですよ。それで私はアジ研の上司に掛け合いましたね、ついに3カ月出してもらいました。第1号は友杉孝君だったかな。その後は2カ月ぐらいでしたかね。それ以来そうもいけなくなりましたね。他とバランスがとれないということらしいですね。そういうことで、調査に力点をのいたわけですね。帰ってくると、調査報告を中心に検討会をやりました。

研究会は、何を執筆するかその人それぞれのテーマがありますから、それを中心に報告してもらって議論をするというやり方ですね。強制

でやれということはおそらく一度もなかったと思いますね。どういう風に村落・農村を書きたいか、自発的にやってみるということをやってきたということです。神戸大学へいった北原淳さんがこないだ手紙をくれまして、「研究会でやっていたことは、大学院ゼミでした」と書いてありましたね。午後3時に始まって6時に終わる予定なのですが、6時頃になっても議論がなかなか終わらないんですよ。これは慣例になっていたのですが、飲み屋に行き続けてやるんです。四谷に約30年近く通った飲み屋があるんですよ。ここでの議論がおもしろかったですね。ときどきウイスキーをサービスしてくれたりしてね。今は行かなくなってしまったけど……。懐かしい思い出です。

だいたい、以上なんですけども、そこでね、「やりたかったけど結局やれなかった問題」について、二、三、述べさせてもらいたいと思います。

我々の研究というのは、平野部が中心だったわけです。山村、山間部はほとんど扱っていません。これは環境問題と非常に関係が深いわけですね。森林の問題ですね。フィリピンの森は国土の2割以下、ほとんど丸裸の状態です。中国も同じでしょう。山に木がないと、洪水、干ばつが起こる。最近、ある本を読んでいたら、森が水分を吸って、地下水を貯えてくれるんですね、徐々に徐々に。それが平野部に流れ出る。同時に葉っぱから水分が蒸散して、雲を作ってまた雨になって降る。森の力というのは、最近読んで感心したのです。森がないと地下水がなくなってしまう、平野部まで届かなくなる。そうすると稲作の灌漑水だけではなくて飲料水の問題にもなってきますね。東南アジアでは各地で飲

料水の問題が起こっていますね。フィリピンなんかでは大変なことになっています。こういう環境問題、人間が生きていく上での環境問題、これはいつもやりたいと思いながらそこまでやれなかった。今年（2005年）の4月に雲南省の昆明まで飛行機で行ったのです。焼畑の資料が手に入らないので出かけて行ったんですけども、香港から昆明まで飛ぶ間に貴州省と雲南省の上空を飛んだんですが、ほとんど森がないですね。それで中国が現在やっているのは、「退耕還林」（山間部の耕地を森林に戻す事業）政策というものです。そうすると農民の食料がなくなりますから、木が大きくなるまで食料は政府が補助する。そういう条例を2002年に出している。黄河の水が海まで届かないような時代ですからね。今、北京オリンピックに向けて、長江の水を北にもっていくために突貫工事をやっているようですけど、長江の水もいつまでであるかわかりませんよね。あんなに木がなければ……。森林をめぐる環境問題、やりたいと思いながらとうとうできなくて。大学にいる時に少し勉強したのですが、相当技術的な知識も要りますからね。東京大学、京都大学の林学の若い人たちがやり始めている。中国にも入り始めているのはよいことです。

それと、環境問題と関連しまして、少数民族の問題ですね。これができなかった。中国でも公称55の少数民族、雲南だけでも20以上の少数民族がいるといわれています。フィリピンでは公称107か108。これは山の中で焼畑農業をやっていたのです。いまでもやっているところがありますが。土地は部族所有で、コモンライト。法律上の所有権ではない。低地の人は法律を知っていますから、山に行ったら少数民族に酒を呑

ませたりして、証書に拇印を押させて、土地を取り上げてしまう。裁判になると土地所有権の証拠が何もないですから、結局、山の中の良い土地を取り上げられて、どんどん奥地に追い上げられていく。さらに人口が増えていくと、焼畑の休閑が十分長くできなくなって、エロージョンを引き起こす。いままもミンダナオに、ムスリムが大勢いるんですけども、戦争状態が続いている。その根本問題は土地問題だと書いた学者がいますが、やっぱり部族所有ですから、基本は同じことですよ。

もうひとつ最近特に関心を持つようになったのは、中国の農業問題です。三農（農業、農村、農民）問題、これが現在大問題になっているんですね。人口13億といっているんですけども、大部分の農民は農村では飯が食えないんですね。それで、大都会へ出稼ぎをしにいったら、都会の底辺で食うや食わずで働いては、農村へ仕送りをする。およそ1億2千万人が、農民工と言われている。特に多いのは、北京、上海、広州、青島のような大都市です。農村に残ったのは妻子と年寄りだけです。日本でも問題になった三ちゃん農業みたいな。おそらく、生産力の低下が起こっていると思いますよ。しかも、私はいまでも若干疑問を抱いているのですが、中国はWTOに加盟したのです。その影響が当然出てくると思います。そうすると安い農産物がどんどん入ってくるはず。大豆も輸出していない。むしろ大量に輸入する状態になっている。戦前、日本では、「満州」大豆といって、日本の大豆は中国の東北地方からきていた。小麦も、もう外国から輸入する状態になっている。

李（2004）という本が最近出ました。中国は、行政的には県、郷、鎮、村になっている。これ

の核になっている人たちはほとんどが共産黨員。彼らがムラで負担になることは全部農民にかぶせてしまっている。農業税という名目ですね。その農業税の廃止という要求が出てきたのですが、そのひとつのきっかけになったのが李昌平。湖北省の郷・鎮で党委員会の書記をしていた人で、当時の朱鎔基首相に訴え出た。朱首相はまともに取り上げて、調査団ができ実態が暴露された。朱鎔基さんにあてた報告書がこの李（2004）という本です。中央政府は農業税の段階的廃止を打ち出しているのですが、なかなか浸透していないのが現状のようです。

新聞の報道によると、農民の自殺が増えているようですね。中国がこれからどういう風になっていくのか、農民暴動も新聞にときどき出てくるようになっている。この人口13億の国のうち、8億ともいわれる農民に我々はもっと関心をもつ必要があるのではないかと。私がいたころからアジ研には中国研究者はずいぶんいるんですよ。でも、大部分が政治経済ですね。農業は

あまりいいですね。農村に入りにくかったからかもしれないけども。もっとも、文献研究ではいろいろ良いものが出ているのですが。いまの皆さんに大いに期待するところです。

長くなりました。以上、雑談で申し訳ないけれども、これで終わります。

文献リスト

- 加納啓良編 1998.『東南アジア農村発展の主体と組織
近代日本との比較から』研究双書492 日本
貿易振興会アジア経済研究所.
斎藤仁 1989.『農業問題の展開と自治村落』日本経済評論社.
山田登 1978.『東南アジアの稲作 品種・施肥および
水管理を中心に』農政研究センター.
李昌平 2004.『中国農村崩壊 農民が田を捨てるとき
』（北村稔・周俊訳）日本放送出版協会.

（東南アジア農業問題研究者，2005年9月22日，
JICA 国際協力総合研修所にて）